

氏 名	松 岡 弥生子
学位の種類	博 士 (学術)
学位記番号	甲 第 1 9 1 号
学位授与年月日	2 0 1 5 年 6 月 3 0 日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	The Effects of Implicit Instruction and the Influence of Communication Anxiety on EFL Learners' Pragmatic Development (英語学習者の語用論的能力の発達における暗示的教授方法の 効果とコミュニケーション不安の影響)
論文審査委員	主 査 教 授 富 山 真知子 副 査 教 授 佐々木 輝 美 副 査 教 授 守 屋 靖 代

---

## 論文内容の要旨

本稿は、英語を外国語として学ぶ日本人学習者の、暗示的指導法での、二つの異なったコミュニケーション手段における語用論的能力の発達に対する効果の違いを、発話行為のひとつの「提案」に焦点をあてて検証したものである。暗示的指導法とは、メタ言語による説明を伴わずに対象となる言語の要点を教えるための指導方法と定義される。本研究では、異なったコミュニケーション手段として、computer-mediated communication (オンラインのコンピューター媒介によるコミュニケーション・CMC) および face-to-face communication (対面のコミュニケーション・FTF) を取り上げた。

CMC および FTF において、ディスカッションをそれぞれ行なう2つの実験群とコミュニケーション活動を行なわない統制群が設置された。被験者の語用論的能力の発達を測定するため、研究期間の最初の週に事前テスト、最後の週に事後テストが実施された。さらに、学習者の個人的要素である communication anxiety (コミュニケーション不安) が、異なったコミュニケーション手段による授業効果に与える影響についても検証を行なった。これは、

学習者がより高い英語運用能力を習得するために、授業モードや学習効果に影響を与えている個人的要因との関係を把握し、効果的な授業法を探求することを目的としている。

暗示的指導法としては、担当教員によるrecast（リキャスト）が採用された。リキャストとは、子供や学習者が誤った言語使用を行った場合に、大人や教員などが、意味を保持しつつ、正しい形にして投げ返すことで暗示的に誤りを指摘し、適切な使用法ができるように導く為のnegative feedback（否定的フィードバック）のひとつであり、様々なコミュニケーションの状況で使用される。例えば、家庭で親が子供の母語の習得のために行ったり、教室で教師が学生の言語運用上の間違いを修正したりする時にも使用される。

研究調査は、2013年度秋学期の10週間に渡り、神奈川県私立大学にて150人の学生を被験者として、同年度春学期に行なったパイロット調査の結果をふまえて行われた。事前・事後テストに加えて、学習者の背景情報を問う質問紙、コミュニケーション不安度計測テスト、最終質問紙等からデータを収集した。事前・事後テストは、discourse completion task（談話完成テスト・DCT）の形式で構成され、Pishghadaml and Sharafadini (2011) や、Martinez-Flor and Fukuya (2005) の研究を参考に作成した。コミュニケーション不安度計測テストは、Booth-Butterfield and Gould (1986) によって開発されたCommunication Anxiety Inventory (CAI) Form Trait を元に作成した。本研究は量的な分析とともに、質問紙から得た学生のコメントや意見も参考にされた。

## 主な研究結果の概要

第一の研究課題では、事前テストおよび実験直後の事後テストのスコアの差の分析を行なうことで、リキャストを用いた FTF と CMC という異なっ

たコミュニケーション手段における学習者の英語運営能力の発達度を計測した。教師は、FTF群の対面ディスカッションでは口頭でのリキャストを、CMC群にはオンラインのディスカッション・フォーラムを使用した書き言葉によるリキャストを行った。統制群に対してはディスカッションやリキャストは行なわれなかった。被験者が発した提案表現は、Fernández Guerra and Martínez-Flor (2006)の開発した評価基準を適用して数値評価が成され、事前と事後テストにおけるそれらの値の変化を検証することで、語用論的能力の発達を測定した。この調査結果によると、FTF群およびCMC群の二つの実験群が、統制群に比べて、やや高い平均値を持っているものの、その差は僅かであり、ANOVA検定の結果、統計的な有意差は検出されなかった。考える要因として、コミュニケーションの時間、学生のリキャストへの気づき、教員のリキャストの技術、さらには、学習者の英語能力などがあげられる。

第二の研究課題では、コミュニケーション手段に加えて、コミュニケーション不安が学習者の語用論的能力の発達に与える影響を調査した。学生の不安度を測るため、上述の不安度計測テストを実施したが、不安度とスコア変化との相関は弱かった。次に、各グループを小グループ内でのコミュニケーション不安度合によって、さらに、高不安群（高不安FTF、高不安CMC、高不安統制群）と低不安群（低不安FTF、低不安CMC、低不安統制群）とに分け、ANOVAおよびTukey法による多重比較検定を行なったところ、高不安FTFと高不安統制群との間に、統計的な有意差が認められた。その一方で、低不安群の間には有意差は見られなかった。実験研究の開始段階では、コミュニケーション不安が高い学習者は人と直接会うコミュニケーションが苦手であると推察されるので、そうした学習者には、人と対面しないコンピュータ媒介コミュニケーションによる授業が効果的であろうと想定されたが、結果は異なっており、その原因として2つの要因が考えられた。一

つは、不安度に関係なく、グループ・ディスカッションなど対面の学習活動にはやはり意義があるという点、二つ目は自己評価によって「不安度」が高く設定されてしまった可能性もあるという点である。

## 考察

語用論的能力育成のための暗示的な授業の効果を検証した結果、コミュニケーション手段の違いが能力向上に与える影響は、学習者のコミュニケーション不安度が高い場合に大きく、そうした学習者には対面コミュニケーションによる授業が効果的であることが示された。第二言語として英語を学ぶ English as a second language (ESL) と比べると、外国語として英語を学ぶ English as a foreign language (EFL) の環境にある学習者では、その対象言語である英語に触れる機会は希少であり、それ故に、授業の果たす役割は重大である。また学習効果を検証する場合には、様々な要素を調査する必要がある。語用論的授業の研究において、メタ言語による説明を伴う明示的指導法の優越が盛んに報告される中、Koike and Pearson's (2005) の修正フィードバックの研究にも示されているように、リキャストのような暗示的指導法には、進行中のコミュニケーションの自然な流れを妨げずに適切な言語運用を教えることができるという利点が挙げられる。大学の英語教育課程の中に語用論の教育を導入したり、語学授業のコンテンツに語用論の要素を念入りに組み込むこと、特に学習者に語用論的表現の発話を教えることは、努力を要する仕事である。リキャストのような暗示的アプローチを教師が会得することで、語用論的能力育成を気軽に授業で試みられることを期待する。また、こうした試みによって、語用論的能力開発のための授業が、単に明示的か暗示的かという議論からさらに前進したものになることが望まれる。

## 論文審査結果の要旨

第二言語習得研究における語用論の領域での研究は、他の領域に比べ後発ではあるが、異文化間語用論や中間言語語用論など目覚ましい発展を遂げている。90年代後半からは語用論的能力の教授可能性について論議が交わされ、語用論的能力は教室で指導するという結論が受け入れられている。従って、現在ではそれを越えて、授業の中で、語用論をどのように教えるのが効果的であるかを追求する研究が増えている。また最近では、インターネット上のコミュニケーションツールやバーチャル・リアリティーを利用した学習者の語用論的能力の育成に注目した研究も見られる。このような語用論的発達研究の流れを振り返ってみると、教室での暗示的指導法における CMC (computer-mediated communication) と FTF (face-to-face communication) を比較検討した松岡氏の本研究は最前線のテーマを扱ったものと言える。

教室での語用論的指導法に関しては、演繹的指導法対帰納的指導法および明示的指導法対暗示的指導法のいずれがより効果的かの追求がなされている。それぞれ相反する結果が出ているものの、後者に関しては、概ね明示的指導の方がより効果的であるという報告が多い。ただし、暗示的指導の効果を示唆した研究もある。松岡氏はそれを踏まえて、会話、即ち意味に焦点をあてた言語のやり取りの中で自然な流れを阻害することなく適切な言語運用を教えることができるという利点に注目し、あえて暗示的指導を採用した。その上で、IT を利用した授業、具体的には CMC と従来の対面型の授業、FTF を、語用論的教育効果の点において比較検討したのである。明示的指導法の優位性が主張される中であって、あえて暗示的指導法の利点に着目したことと、それを CMC と FTF の比較に絡ませたことを評価したい。結果は、両者の差及びそれぞれと統制群との差が見られなかったのであるが、他の語用論的能力の指導に関する研究同様、さまざまな要因が複雑に働いていることが推測される。本研究においても、具体的指導方法（リキャ

ストの方法)、指導時間、さらに学生の習熟度や学習スタイルと指導法の整合性等々によって異なった結果がもたらされることが推測され、今後のさらなる検証が望まれる。

本研究は、学習者の個人要因のひとつであるコミュニケーション不安にも着目している。CMC と FTF という異なったコミュニケーション手段において、学習者が持つコミュニケーション不安がどのように影響するかを検証したことは評価に値する。結果は予想に反してコミュニケーション不安が高い学習者の方が FTF において教育効果が認められたのであるが、別な観点からすれば、従来型のコミュニケーション手段による通常の授業形態の強さも確認されたわけで、ひとつの発見ではある。また、コミュニケーション不安という情意的要因の研究に常に伴う測定方法の難しさを示唆しているとも言えよう。

学習者の語用論的能力の育成をはかるためには、その指導が可能な教員を養成する必要があるのは言うまでもない。そのための教員ハンドブックや指導案、そして教材の開発など実践面への貢献は、本研究をはじめとして、先行研究を元地道に前進することによってしか成り立たない。第二言語習得の語用論研究は、文法や語彙を越えて言語のあらゆる側面を包括的にとらえなければ成り立たない領域である上、学習者とそれを取り巻く人間の、社会文化的背景までも巻き込む壮大な領域である。にもかかわらず、この困難な領域の、困難な実践面での研究を行った松岡氏のチャレンジ精神を評価するとともに、今後の研究に大いに期待したい。

博士論文審査(口頭試問)では中間審査における各委員からのフィードバックをどのように受け止め、どのように対処したかということから始まり、委員との活発な質疑応答が行われた。また、各委員からは今後の論文発表や出版および研究課題等について助言が与えられ、松岡氏はそれらを真摯に受け止めた。

本論文に関して、2015年5月26日午前10時10分より11時20分ま

で、国際基督教大学第1研究棟257号室で、審査委員全員による口頭試問が行われ、引き続き審査委員会が開催された。その結果、委員全員の一致を得て、本論文が国際基督教大学大学院アーツ・サイエンス研究科における博士の学位を授与するに値すると認めた。